

本当に幼児の味方であった人

石 森 延 男

いささか古い話になる。

わたしが、満州大連に渡っていったのは、昭和二年の春、

それから十四年間、同地で働き、文部省図書局に招かれて上京することになった。

大連に住んでいたとき、向かいの家でたいへん親しくしていた小山田さんという一家があった。その長女とわたしの長女とは、同年生まれであり、その長男坊とわたしの長男坊とは、これまた同年生まれ、こんなふしぎな縁で、子ども同志の親交が、おのずから両家を近づけていった。

小山田さんのご主人は、小学校長で、奥さんは、節子さん

とって、当時大連では、数少ない幼稚園で、主任の位置で働いていた。

こんなにも園児を愛し、一にも幼稚園と、二にも幼稚園と、献身的に働く人を、わたしは知らない。そのころはまだ幼稚園などには、世人の関心はうすかった。それなのに節子さんの幼稚園熱は燃えるようだった。幼児の玩具を研究したり、遊び方を工夫したり、幼年製作について骨をおったりしていた。もちろん節子さんの長女も次女も、その幼稚園で育った。この二人は、ピアノも歌うことも上手になり、長女は、上野音楽学校もでるほどであった。

幼稚園時代の好き嫌いが、その人の一生を支配すると節子さんはいつていた。その実証が二人の娘さんたちにもみることができぬ。

戦後、苦しいなかを引き揚げてきて、群馬のいなかにおちつき、いまは、しずかに長男と暮している。もし近くに幼稚園があれば節子さんは、おそらくでかけて行って、リトミックをやらかし、恩物をもてあそび、お話にむちゅうになるにちがいない。いわば節子さんは、幼稚園の鬼である。

ある日節子さんに、わたしはこんな愚問を発したものだ。

「いったいあなたは、どうしてそんなに幼稚園ずきになつたんですか。」

節子さんはいかにも嬉しそうな顔をして次のように答えた。

「わたしは、もともとお茶の水で、保育科をでたものですからね。」

それにしても、人一倍働くし、ただ働くということではなく、園児とともにあることがなによりも生きがいを感じ、ひたすら喜んでゐる姿が、わたしにはうらやましいほどであった。わたしとても、子どもは嫌いではない。前から好きなおで、そのころも近所の子どもたちを集めては、演劇の指導

をした。ラジオに出演した、「歩こう会」をはじめた、そうしては愉しんでいた。しかし節子さんのように、うつつをぬかすところまでに、自己放棄はできなかった。

「保母さんたちは、みな、それぞれその道の勉強をした人たちでしょうが、あなたのように、そんなに——」

と、わたしがいいかけると節子さんは、

「いいえ、べつに、わたしが熱心だというわけではありません。ただすぎなだけです。このように導いてくださ

つたのは、倉橋惣三先生でした。」

と、答えたのみである。

『倉橋惣三』というお名前は、それ以前、なにかの本で知っていたが、こんなにじかに耳でその名を聞いたのは、はじめてであった。一人の先生の影響というものが、こんなに根深いものであろうかと、じつは驚いた。一生を、そのことにうちこめる情熱をわきたたせるその原動力——倉橋先生とは、どんな人であろうかと、そのとき以来、わたしの私淑する人になつてしまった。

前にも記したように昭和十四年四月、わたしは、招かれて文部省図書館に転任することになり、もっぱら国語教科書の

編集に当った。国民学校に移行する直前のこととて、仕事は山積していた。それなのに、編集のほかに、いろいろな委員会にもでなければならなかった。国語審議会、放送教育協議会、映画審査委員会など。そうしてそのほかに文部省推薦図書委員会なるものもあった。

これは、青少年たちが、進んで読むべきものを毎月厳選し、読書指導に資しようとした仕事である。滑川道夫君や泉節二君など数人が予備調査して多くの図書の中から、これという図書を選ぶ。それをさらにこの推薦委員会にかけて、決定する仕組みになっていた。社会教育局の仕事になっており、成人課がその主務を取り扱っていた。われわれ図書館に働いていたもの、歴史では森下、理科では桑木といった図書監修管が数人出席し、他に、外部からその道の人たちが参加して、きびしい論議と吟味を重ねて、推薦図書は定められた。この制度は、その当時、物資不足の時代にも必要なことであつたが、今日のように出版混乱の時代にこそ重要な仕事であるうと、わたしは考える。

外部から参加した委員、学識経験者の中に、倉橋惣三さんがいた。そのおだやかな風貌、おちついた話ぶり、はじめて

の印象は、あたたかい人の一語につきると思つた。あるとき、「先生は、大連に住んでいる小山田節子さんをおぼえておられますか。」とおたずねした。

「知っています。よく知っていますよ。」

多年にわたり、数多い教え子たちを持っておられるだろうに、はつきりと、こう答えられた。

「どうして、あなたは、小山田さんをご存知なのですか。」と、わたしに反問される。そのときのいかにも懐しげに語られる倉橋さんの語調は、とおり一べんのあいさつではない。

「こんど大連からこちらに転任してきたのですが、あちらでは、わたしの家のま向かいに小山田さんが住んでいたのです。」

倉橋さんは、ふしぎな偶然性に驚かれ、また感動したように、わたしを見つめた。師弟の愛情とよく口でいわれるが、その存在を眼前に見たかのように、わたしは感銘した。それから倉橋先生とわたしは、にわかに関しさを増していった。

内村鑑三全集の編集者の一人に、倉橋先生が加わっていることを知って、いよいよ先生の愛の深さの故ある所以を理解した。

わたしは、十九才になった長女をチフスで失なった。その葬儀の日、小山田さんの長女がピアノで葬送曲をひいてくれた。わたしは、それ以来内村鑑三先生の無教会に入信し、その道を辿るにいたった。そうしたことから倉橋先生とは、ただの交際ではなくなった。

私事にわたって恐縮だが、昭和十五年二月に、わたしは「幼子への話」(母のために)という本を書いた。出版前に倉橋先生に原稿をお見せすると、序文を書いてくださるとう、願ったりかなったりでこんな嬉しいことはない。さっそくお願いしたのである。次の文は、そのほんの一部である。

——珍らしい話を知っている物識りは世にいくらかもある。話し方の達者も世に少なくない。しかしそんなことを、子どもはおかあさんに求めてはいない。ただもう、母の語ってくれる話を聴きたいのである。

おかあさん方。そんな水臭い思いすごしなんか捨てて、どしどしお話をしてあげなさい。しかしどうせするお話なら、なるべくおもしろいお話を、いくらかでも上手な話の方を、と思うのもまた母の心であろう。そこをこの著者が

汲んでいるのである。「なんでもありませんよ。」「そんなにむずかしくお考えになることはありませんよ。」といいながら、にこやかに相談相手になろうとしているのである。その態度が嬉しくてならない。

著者はこの本の中で、幼ない子どもへの話というもの、家庭における母の話というものについて、その心もちを、ふうわりと語り示している。またそれに添えて、ふさわしい多くの例をあげている。すなわち話し方と話材とを合わせた本で、しかもいかにも心安く平盆に盛りつけられているといったふうのところに、母と子の傍に近くいようとする著者の心づかいが豊かに出ている。——

なんといたわりのある序文であろう。さすがに倉橋先生は、ほんとうに幼児の味方であった人である。わたしが、児童文学などを書くようになったのは、倉橋先生のこうした励ましといたわり支えにあるといってもよきさぞうだ。

一と粒の麦として倉橋先生はすでになくなられた。が、節子さんにしても、わたしにしても、まだこの世にあって心から先生を仰慕してやまない。